

詩編 55 : 23

ローマの信徒への手紙 8 : 35~39

「御手の中に」

(ハイデルベルク信仰問答 問 27~28) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】

【招詞】 マルコによる福音書 1 : 15

【祈祷】

【聖書】 詩編 55 : 23、ローマの信徒への手紙 8 : 35~39

【説教】 「御手の中に」

＜天地の造り主、全能の父なる神＞

前回から、ハイデルベルク信仰問答は、「使徒信条」において、わたしたちが何を信じているか、聖書から何を信じるべきか、ということをお教えしようとしています。

先週と今週は、使徒信条の一段落目、「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」という部分から、三位一体の「父なる神」についての内容と、その御言葉を聞いています。

前回は、神さまが、この世を創造されたということ。つまり、この世界も、わたしたちも、神さまの御言葉、神さまのご意志によって存在している、ということが語られました。

だから神さまは、お造りになったこの世界を、わたしたちを、良いご計画と、恵みの御心の内に、保ち、支配し、導いて下さるのです。このことを、「摂理」と言います。

そして、この創造と摂理をもって世界を導かれる神さまは、全能の力をお持ちである、ということをお学びました。

全能とは、奇跡を何でも起こせる力があるというよりも、むしろ神さまが、完全な愛を全うする力がおありになる、ということです。全能の力とは、神さまが、わたしたちへの愛のために、わたしたちの救いのために、あらゆることを成し遂げて下さる力のことなのです。

この、全能の父なる神さまの愛は、この世にクリスマスに遣わされた、神の御子イエスさまにおいて、最もわたしたちに表されました。今日は、アドベントクランツに四つの光が灯りました。いよいよ今週、クリスマスがやってきます。

まことの人となられて、世にお生まれになった神の御子イエスさまは、父なる神さまが、ご自分の愛を伝えるために、わたしたちに与えて下さったお方です。

この神の御子イエスさまは、父なる神さまの御心を実現するために。つまり、わたしたちを救うために、神の身分を捨てて世に下り、ご自分の命を捨てて十字架に架かり、わたしたちの罪を贖って下さいました。

そのようにして、父なる神さまは、ご自分の愛する御子に、わたしたちの罪を、裁きを、死を、すべて負わせられたのです。

わたしたちへの愛のゆえに、わたしたちを救うために、父なる神さまは、何でもして下さる。愛する御子イエスさまの命さえ、わたしたちに与えて下さることがお出来になる。

それが、イエスさまの十字架によって、わたしたちに示された、父なる神さまの愛であり、神さまの全能の力なのです。

そして、この神の御子イエスさまの救いの御業のゆえに、わたしたちは罪を赦され、罪の奴隷から神の子とされ、この天地の造り主であり、全能である神さまを、「わたしの父」と親しく呼ぶことがゆるされています。

こうして、造り主と被造物が、神さまと人間が、まことの父と子のような、親しい、愛の関係の中で、喜びのうちに共に生きること。それが、父なる神さまの御心であり、この恵みに向かって、神さまは、わたしたち一人一人を導いて下さっているのです。

<摂理>

さて、その続きで、今日のハイデルベルク信仰問答の問 27、28 は、父なる神さまの「摂理」というものを、さらに深く掘り下げています。問 27 にはこうあります。「神の摂理について、あなたは何を理解していますか。」

「摂理」とは、先ほども少しお話しましたが、世界をお造りになった神さまが、善いご意志、善いご計画をもって、神さまの目的に向かって、この世界を保ち、支配し、導いて下さるといふことです。

わたしたちをお造りになった神さまは、世界やわたしたちを造りっぱなしにして、あとは放置されたものではありません。父なる神さまは、今を生きるわたしたちが、神さまの善いご計画、善い目的に向かって、共に歩むことが出来るように、これまでも、今この時も、またこれからも、リアルタイムで関わり、働きかけ、助け、導いて下さるのです。

この「摂理」という言葉は、英語で providence と言います。Pro は前、前方、という意味で、video は見る、という意味です。「前を見る、先を見る」というのが「摂理」という言葉の意味なのです。

前を、先を見ておられるのは、世界をお造りになり、支配しておられる父なる神さまです。一方で、わたしたちは、先を見通すことが出来ません。

わたしたちは目の前の出来事で精一杯です。また先を見ようとしても、わたしたちは自分の願望や、自己中心的な将来、自分の理想の未来しか見ようとしません。

だからこそわたしたちは、神さまが見ておられる先を、神さまの目的を、神さまと共に見ようとするのが大切です。

そして、今わたしたちに、またこの世界に起きている、あらゆることも、その神さまのご計画や目的に向かって、神さまの御手によって、導かれていると信じるのです。

この時わたしたちは、この摂理が、神さまの「愛」に基づいた、善い意志、善いご計画の内にある、ということをはっきりと知らなければなりません。

そうでなければ、神さまの摂理、という時に、わたしたちは、却って混乱や疑いを抱いてしまう。あるいは、神さまが決めたことだからどうしようもない、というような、諦めの思いを、この「摂理」という言葉に抱いてしまうからです。

問 27 をもう一度見てみましょう。「神の摂理について、あなたは何を理解していますか。」

答えはこうです。「全能かつ現実の神の力です。それによって神は天と地とすべての被造物を、いわばその御手をもって今なお保ち支配しておられるので、木の葉も草も、雨もひでりも、豊作の年も不作の年も、食べ物も飲み物も、健康も病も、富も貧困も、すべてが偶然によることなく、父親らしい御手によってわたしたちにもたらされるのです。」

神さまは、ご自分がお造りになったすべての被造物を、全能かつ現実の神の力で、その御手をもって、今なお保ち、支配しておられる、と語ります。そして、そのご支配を具体的に上げて、木の葉も草も、雨もひでりも…と語っていきます。

しかし、わたしたちはここで躓くのです。豊作や、健康や、富であるなら、わたしたちはそれを願い、また与えられたら喜んで受け取りたいと願います。

しかしここには、不作の年も、病も、貧困も、とあるのです。良いことも、そしてわたしたちにとって悪いことも、すべてが偶然によることなく、神さまの父親らしい御手によってもたらされる、というのです。

苦しみや、悲しみは、もたらされたくありません。災いを遠ざけて下さいと、わたしたちは祈ります。もちろん、そのように祈ってよいのです。

しかし実際、わたしたちには苦しいこと、悲しいことが起こります。不条理なこと、納得できないこと、理不尽なことも、たくさん起こります。それが、確かな現実です。

わたしたちの信仰は、信じれば、苦しみや悲しみを避けられる、というものではありません。むしろ、信仰のゆえに、苦しむことさえあるのだと、聖書は語っています。

ハイデルベルク信仰問答は、理想や、机上の空論を教えているものではありません。不作もある、病もある、貧困もある。信仰の戦いもある。迫害もある。痛みも、苦しみも、涙もある。むしろ、わたしたちの現実を、しっかり見つめようとしているのです。

なぜ理不尽なことが起こるのか。なぜ苦しいことや、悲しいことがあるのか。わたしたちは疑問に思います。答えを知りたいと思います。でも、その答えを見つけることはできません。仮に誰かに、これがあなたに苦しみを与えられる理由だ、これが不幸の原因だ、と言われても、きっと納得することなど、決してないのだと思います。

また一方で、理由などない、すべて偶然だ、と言われても、救いがありません。

考えてみましょう。もしわたしたちに起こる苦しみの出来事が、意味も何もないもので、神さまの御手の外から来たものだと言われたら。一体何の力が、わたしを支配しているのでしょうか。たまたま災いが、そこにいたあなたに降りかかっただけ。あなたの運が悪かっただけ。そういわれたら、わたしたちはそれこそ、苦しみをどう受け止めたらいいのでしょうか。正体不明の運命とやりに、単なる偶然に、わたしの人生は振り回され、終わってしまうのでしょうか。

…そうではないのです。わたしたちは、起こるすべてのことが、良いことも、そして好ましくないことであっても、すべてが神さまの御手の中にあると信じます。

だからわたしたちは、神さまにこそ、苦しみを訴えるのです。どうしてですかと、神さまに向かって、叫ぶこともできるのです。神さまに向かって、必死に祈る。必死に叫ぶ。神さまにこそ向かって、相対していくのです。

そのように、わたしたちの思いを向ける先があるということ。そして、それを受け止めて下さる方は、わたしたちをお造りになり、愛して下さる、父なる神であるということ。そこにわたしたちは、やがて慰めを、本当の癒しを、希望を、見出していくのです。

<父らしい御手>

わたしたちは苦しみの中でこそ、神さまに向かうべきです。苦しみそのものを見ていても、また苦しんでいる自分自身を見つめても、そこには何も見出すことはできません。自分の罪や、弱さ、惨めさ、無力さを見つめるばかりです。

しかし、苦しみの時こそ、わたしたちは自分が、神さまから遠ざかっていくような気がするのではないのでしょうか。神さまを疑う心。神さまに信頼できない心。神さまへの怒り。

そして、そんな自分の心から逃れなくなり、現実を見つめるのも嫌になり、殻に閉じこもりたくなるのです。

でも実は、そのような時こそ、本当は心の奥底で、最も神さまを求めている時なのではないのでしょうか。そのような時こそ、実は、最も真剣に神さまのことを考え、全力で神さまに問いかけ、向き合っている時なのではないのでしょうか。なぜなら、このような問いは、単なる頭の中の考えごとではなく、自分の人生が、実存が懸かっている問いだからです。

そして、そのようなわたしたちの叫びに、父なる神さまが、答えて下さらないはずがありません。神さまは、わたしたちの思いを超える仕方、その全能の力で、わたしたちのために愛の御業を、必ず成し遂げて下さるお方だからです。

わたしたちへ愛は、わたしたちを救う力は、御子イエスさまの十字架によって、すでに証明済みです。

ですから、神さまが、わたしたちに意地悪をなさったと考えてはなりません。神さまがわたしたちを苦しめようとしておられる、などということは、決してありません。

わたしたちの涙や、ため息や、叫びをご覧になる時、間違いを恐れず言えば、神さまの方こそ命がけで、わたしたちに向かってきておられるのです。

ですから、父なる神さまの摂理を信じるということは、神さまがなさることだから、考えても仕方がない、どうしようもないと諦めることではありません。

摂理とは、どのようなことが起こったとしても、わたしを造り、愛し、導いておられる全能の神さまが、わたしの父として、必ず恵みへ導いて下さると信じることです。

だから、この方にこそ全体重を預けることが出来る。重荷をすべてその御手に委ねることが出来る、ということなのです。

今日の旧約聖書の詩編 55：23 にも、こうありました。

「あなたの重荷を主にゆだねよ／主はあなたを支えてくださる。

主は従う者を支え／とこしえに動揺しないように計らってください。」

この「ゆだねる」という言葉は、「投げる」という意味もあります。この重荷を、苦しみを、悩みを、主に投げつけてよい。そう言っているのです。主なる神さまは、そのようなわたしたちの重荷を、すべて受け止めることが出来るようになります。そして、主は、わたしたちを支えてくださる。とこしえに揺れ動かないように、神さまの恵みに固く立つことが出来るように、わたしたちのために、計らって下さる。そう約束されているのです。

摂理とは、このように、苦しみの現実の中にあるわたしたちに与えられている、確かな拠り所であり、最後まで持つことが出来る希望なのです。

問 27 の「神の摂理について、あなたは何を理解していますか」という質問の答えに、「全能かつ現実の、神の力です」とありました。全能、かつ現実の、神の力。

摂理とは、神さまの愛の全能の力であり、かつ、わたしたち一人一人の、人生の具体的な「現実」において働く、神さまの力のことなのです。わたしたちは、日々の生活の中で、この生きている現実の中で、守り、導き、働いて下さる神さまの力を、この目で確認し、この体で体験していくのです。

<益>

ですから、ハイデルベルク信仰問答の問 28 は、続けてこう問うています。「神の創造と摂理を知ることによって、わたしたちはどのような益を受けますか。」

神さまの創造と摂理を知るとは、現実の中でその全能の御力を体験することは、わたしたちにとって益となること、つまり恵みをもたらすことなのです。ここでは、三つのことが述べられています。逆境において、順境において、そして将来についてです。

[①逆境]

まず、「逆境においては忍耐強く」される、とあります。ひでり、不作、病、貧困。また、様々な痛みや困難に見舞われる時。しかし、わたしたちはこのことを通しても、全能の神さまの御力によって、神さまの善い目的へと導かれている。そう信じて、忍耐強く歩むことが出来る、というのです。

でも、もう苦しみには耐えられない。そう言いたくなることがあるかも知れません。

思えば、逆境において忍耐する、と言っても、わたしたちの忍耐力のあるなしに関わらず、わたしたちは否応なしに、その苦難の中に立たされてしまうのです。もう耐えられないと言っても、そこで生きざるを得ないのです。

ですから、わたしたちにとって、逆境において忍耐強くあるとは、わたしたちの我慢強さや、耐える力のことを言っているのではないでしょう。

ギリシア語では、「忍耐」という言葉は、そこに留まる、という言葉です。そして、わたしたちが留まるべきは、父なる神さまの御許です。

わたしが逆境の中にあり、揺らいでも、倒れても、この父なる神さまの大きな御手は、わたしを丸ごと包み込んでおられます。わたしたちは、どのような時も父なる神さまの御手の中に置かれています。わたしたちを愛して下さる父なる神さまの御手は、わたしたちの最後の拠り所。決して失われない「よすが」です。

だからわたしたちは、希望をもって、その神さまのご計画が成る恵みの時を、救いの時を、留まって待つことが出来る。それが、逆境においては忍耐強く、ということでしょう。

[②順境]

そして、二つ目の益は、「順境においては感謝」する、ということです。それは、あらゆる喜びも、楽しみもまた、父なる神さまの御手から来るものであると、知っているからです。

わたしたちの日々の営みの中で、当たり前のこと何一つありません。目覚めてから、眠るまで、眠っている間も、日々のすべてにおいて、父なる神さまの御手によって、必要が備えられ、守られているから、今日もわたしたちは生きているのです。

すべてのことを、感謝を持って、大切に受け取ることが出来る。神さまの豊かな恵みを、一つ一つ、数えることが出来る。これが、神さまがすべてを支配し、導いておられることを知る中で与えられる、もう一つの益です。

[③将来]

そして最後の三つ目の益は、こうあります。「将来については、わたしたちの真実な父なる神をかたく信じ、どんな被造物もこの方の愛からわたしたちを引き離すことはできないと確信できるようになる、ということです」。

逆境の時、順境の時。これは、わたしたちの具体的な現実のことです。この現実の中で、わたしたちは良い時も、悪い時も、神さまに委ねつつ、また感謝をしつつ、歩みます。

そして実際に、わたしたちは日々の中で、人生の中で、神さまの恵みに驚き、慰めをいただき、涙を拭われ、心を強められる経験を、積み重ねていくのです。

今、ここでイエスさまを信じ、礼拝を献げている方の中で、そのような経験を持っていない、という方はいないと思います。大きくても、小さくても、わたしたちは神さまが生きて

働かれることを、恵みを与えて下さることを、神さまご自身から教えられてきたはずです。

この神さまに生かされる日々の現実が、神さまから与えられた恵みの一つ一つが、わたしたちに、将来についても、父なる神をかたく信じ、この方の愛から決して引き離されることはない、という確信を与えてくれるのです。

わたしたちの益とは、自分の願いが叶ったり、苦しみがなくなったりすることではありません。苦しみの時も、喜びの時も、逆境においても、順境においても、神さまの恵みを体験し、神さまの愛を深く知っていくこと。それこそが、わたしたちにとっての益なのです。

そして、神さまへの信頼をますます強められていく。神さまをますます愛するようになる。それゆえに、将来のことも、確信をもって父なる神さまの御手に委ねていくことが出来る。

これこそが、父なる神さまの創造と摂理を知ることによって、わたしたちに与えられる、益なのです。

<神の愛>

さて、この問 28 の答えには、今日読まれたローマの信徒への手紙が引用されています。8:38~39 にはこうありました。「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」

ここで大切なのは、神さまの愛が、「わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛」と語られていることです。イエスさまの十字架の死と復活によって示された、神の愛です。前回の、ハイデルベルク信仰問答の問 26 でも、天の父なる神さまが、「御子キリストのゆえに、わたしの神またわたしの父であられる」と語られていました。この問 28 の「この方の愛」というのもまた、「わたしたちの主イエス・キリストによって示された」父なる「神の愛」なのです。

わたしたちは、父なる神さまを見つめる時、その御心を求める時、摂理について考える時、いつでも、御子なるイエスさまを見つめなければなりません。この方にこそ、神さまのすべてが現わされているからです。

罪人であるわたしたちのために、御子の命を与えてくださるほどの神の愛。わたしたちの罪を赦すために、御子が十字架に架かって死んで下さることさえお出来になる、その全能の力。すべては、この世に来て下さったイエスさまによって、明らかにされました。

そして、十字架に架かり、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ぶ、究極の絶望の中で死なれたイエスさまを、父なる神さまは、その御心に従って、救いのご計画に従って、復活させられ、この方の十字架を、わたしたちのための愛のしるし、救いのしるし、勝利のしるしとなされたのです。

ですから、わたしたちは、イエスさまの十字架と復活を通して、わたしたちがどのような

逆境であっても、神さまに見捨てられたと叫ぶようなところにさえあっても、神の御子は必ずわたしたちと共にいまし、また必ず、そこには父なる神さまの愛の御手が働かれていると信じる事が出来るのです。

神さまの御心は、必ず成る。愛の御心、救いの御心は、必ず実現する。わたしたちは、イエスさまの十字架と復活を見つめることによってこそ、そのことが確かであると、信じる事が出来るのです。

問 28 の答えの最後にはこうありました。「なぜなら、あらゆる被造物はこの方の御手の中にあるので、御心によらないでは、動くことも動かされることもできないからです。」

造り主なる、全能の父なる神さまの御心がなければ、わたしは動くことも、動かされることもありません。他の何ものも、わたしに手出しをすることはできません。この世の誰も、この世の何ものも、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された、父なる神さまの愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

<お祈り>

天の父なる神さま

あなたの愛の御手を信じます。全能の力を信じます。恵みの御心、ご計画を信じます。御子イエスさまにおいて、すべては現わされ、わたしたちに届けられています。

わたしたちが、キリストにあって、わたしたちの父なるあなたの御手に、すべてをお委ねし、どのような時も、あなたの恵みの許に留まることが出来ますように。日々の一つ一つに、感謝をもって歩めますように。あなたの救いの恵みを確信し、あなたにますます信頼を寄せ、あなたをますます愛する者とならせて下さいますように。

このお祈りを救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 4 4 7 「神のみこころは」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 2 5 「父、子、聖霊に」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン